

在外研修報告

1988年12月15日から1989年2月10日までの56日間、文部省在外研究員としてインド、パキスタン、ネパールに出張した。訪問の目的は、仏教が発生・展開したそれらの国々においてどのように仏教寺院が成立・発展し、寺院内の組織が形成されていったか、そして、それが寺院建築や伽藍配置とどのように関連するかを、主に遺跡の上から把握することにあった。

インドではニューデリー国立博物館を主たる滞在地とし、同館のラナジット・バネルジー氏とチャヤ・バッタチャリヤ女史に種々便宜をはかって頂いて関係資料を調査した。遺跡の上ではサンチーの塔、アジャンタ、エローラの石窟寺院を実見した。サンチーには残存状態のよい建築遺構が多数ある。紀元前2世紀の覆鉢塔形式のストゥーパ（仏塔）である第一塔がよく知られているが、その他に仏塔・祠堂（チャイティヤ）・僧院（ビハール）があり、デカン高原中のよく目立つ独立丘陵上にある。神聖視されていた場所に釈迦の遺骨を祀ったのであろう。

中西部インドのアジャンタ、エローラでは仏塔から仏像に礼拝の対象が変わってゆく祠堂や僧の起居する僧院の構造を観察した。初期には祠堂を主に作る傾向があり、礼拝する場としての性格が強いが、4世紀頃には僧院が多くなり、僧の止住する場としての寺院の成立が窺われる。この他、北インド方面ではボードガヤ、ラジギール、ナーランダ、バイシャリー、サールナート等を訪れ、パータリプトラの宮殿跡、カジュラーホのヒンドゥー、ジャイナ教の寺院を巡った。ナーランダは5～12世紀の学問寺院で、玄奘三蔵が尋ねたところとして著名である。発掘された広大な建物群がかなり整備され、修復作業も行われていた。遺跡の中央に巨大な仏塔があり、他に祠堂が3箇所、僧院が11箇所あり、建物の配置状況がよくわかる遺跡である。

パキスタンでは、ラホール博物館の主任研究官タリク・マスード氏を訪ね教示を得た。遺跡はタキシラ、ガンダーラ方面を中心に踏査した。タキシラではビール丘、ダルマラージカ、シルカップ、ジャンディアル、シルスフ、モフラモラドゥー、ジョーリアン等の寺院跡・都市跡を巡歴した。ダルマラージカ寺は小高い丘の上にある大規模な寺院で、アショカ王の創建にかかるという大仏塔を中心に多数の仏塔・祠堂・僧院跡がよく残っており、この地方の主要寺院であったと思われる。ガンダーラ方面ではタフティバハイとスワート渓谷のプトカラ、ウディグラム、ゴクダラー、ガレガイ、シンゲルダール、バリコット、ジャハナバード等を訪れた。プトカラは大仏塔の周囲に多数の小仏塔があり、それらを飾る石像類が原位置でよく残っていて貴重である。タフティバハイは山上の寺院で、塔院・祠堂・僧院・講堂の他、食堂等の寺院の生活を支える遺構の残存状況が極めてよい。寺院組織が整備された段階のものであろう。

ネパールは短時日の訪問であったが、カトマンズと古都パタン、バクタプールの王室や寺院を見学し、現代に強固に機能している宗教の姿を見ることができた。

発生・展開期の仏教の寺院組織の研究はまだ未開拓に近い分野で課題も多いが、今回の歴訪で得た成果をもとに、今後の研究を進めたい。

（加藤 優）